

---

# 幽霊って見たことある？

深夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽霊って見たことある？

### 【Nコード】

N5189C

### 【作者名】

深夜

### 【あらすじ】

永沢雅也と真田遙は同じ大学に通う同級生。ある日の事、遙は雅也に突然質問する。「幽霊って見たことある？」二人と「見た事のない幽霊」の物語。

## 前編

「幽霊って見たことある？」

彼女からの質問が、予想外だった事に戸惑いながらも、

永沢雅也は表情を変えることなく答える。

「テレビや映画以外じゃ見た事は無いな・・・」

「雅也らしい答えだね。」

予想通りである事を楽しんでいるかのように、

笑いながらそう言う彼女、真田遥は同じ大学に通う同級生だ。

付きあい始めてもうすぐ1年になるが、遥がオカルトじみた事を言ったのは記憶にない。

永沢雅也は決定的な現実主義者である。

「幽霊」なんて存在を肯定するはずが無い事は、彼を知る人ならば、誰もが予想できる事だった。

しかし、否定できる証明がない限り、

「幽霊はいない・・・」と言わないことは、

彼女である真田遥しか予想できない。

「なにかあったのか？」

夏であるから思いつきでそんな質問が出たとは考えられなかった。

お互いに1人暮らしをしているのだから、夜中に何者かの気配を感じたというのならば、

物騒極まりない。彼女の身を考えるならば心配なのである。

「・・・うん。気になる事があってね。」

「幽霊の事なのかい？」

二人の足が止まる。

「私は幽霊なんて見た事ないから・・・」

見た事も無い「幽霊」。

しかし、雅也は「気になる事」がそれに全く関係が無いように思えない。

3時限目の授業までは1時間以上時間がある。

大学に向う途中にある喫茶店『陽だまり』

そこで二人は「気になる事」について話し合う事になった。

「気になる事って？」

いつも雅也の質問は単刀直入だ。

「まあ、ちよつと待ってよ・・・」

ちよつとした覚悟を決めたかのように、遙はアイスコーヒーを口に含む。

「驚かないで聞いてね。幽霊の事なんだけど・・・」

「見た事の無いのに、幽霊の話なのかい？」

「そう、見た事は無いの。」

見た事は無い「幽霊」。

しかし、「幽霊」は存在するのだと遙はゆつくり説明する。

なんでも、視覚ではなく感覚の中に飛び込んでくる「他人の思考」が幽霊なのだという。

遙には、ラジオのチューナーを頭の中で無理やり合わせられるような感覚がある。

その強制力が弱ければ、自分の意思で拒絶でき、強ければ拒絶することが出来ない。

結果、一方的に他人の思い・感情・画像等が頭の中に雪崩込むのだ。

「つまり、頭の中に思い浮かぶ事が『幽霊』って事か？」

遙の妄想であると結論付けたかのような雅也の顔。

「・・・ここまでの説明だけでは、雅也がそんな反応するって思ってたわ。」

そのような反応に、遙は気にすることなく受け流す。

「さっきね、受信したんだ。」

「幽霊のチューナー強制つてヤツか・・・」

「ここ何日間が続いてるの。かなり強烈だったから、わたしも困っちゃって・・・」

強制には2つの種類があるようだった。

全く見ず知らずの「幽霊」から受ける強制的受信。

知っている、知っていた「幽霊」（死んだ人）から受けるメッセージ的受信。

前者は受信できる人に手当たり次第の、いわゆる「悪霊」である場合が多い。

後者は何らかを訴えたい場合の、いわゆる「守護霊」である場合が多い。

「雅也、首の後の方。背中との間、冷たくなったり、痛くなったりする事無い？」

「ああ、最近肩こりかなって思ってたところなんだけど。」

やっぱりと言った表情を浮かべる遙。

「幽霊つて、そこから入ってくるの。」

「・・・俺に幽霊がとりついてるって事か？」

「そこまでは私にもわかんないけど、雅也から飛んできているのはわかるんだ。」

「飛んでくる・・・」

遙は、感じる能力をラジオのチューナーだとすれば、「幽霊」は電波であると説明する。

今の雅也には、「幽霊」がとりついてる・・・もしくは、電波が

入り込んでいて、

常に強制受信する電波を発信している状態なのと言う。

さすがの雅也も遙が作り話を言っている事でないことは理解できた。しかし、第三者がこんな話を聞いたのならば、遙がどのように思われるか不安でもあった。

「その強制受信の電波はどんな内容なんだい？」

「そう、その内容が大変なのよ・・・」

そして、雅也は言葉を失う。

「こんな話突然されたら、誰だって驚くから・・・」

慰めるように遙はささやく。

「背中が寒くなってるでしょ？」

寒いと言われなければ、その感覚が「寒気」である事がわからないほどの混乱。

「これが『幽霊』なのか？」

「大槻教授ならば、『プラズマです』って説明するんだろうけどね」

（笑）

笑う遙。

笑えない雅也。

## 中篇

「幽霊は、なんて言ってる？」

「言葉じゃないんだよ・・・難しいんだけど・・・」

遙が受信する情報は、感情や映像といったものが多いらしく、それらをパズルのように組み立てないと、「幽霊」が何を言わんとしているか理解できない。

はつきりと言語として聞こえるわけではなく、

言葉を聞いたあとの「余韻」のような感覚が頭の中に残る。

だから、「幽霊」が何を伝えたいのかは、非常に集中力を要するのだ。

「雅也、昨日冷蔵庫に入れてきた私の分のプリン食べたでしょ。」

「・・・ごめん、2つ全部食べちゃった。そんなことも分かるのか？」

「幽霊が教えてくれるたんだよ。」

他にも雅也しか知りえない情報を、遙はいろいろ知っている。

でも、雅也が「恥」と感じる部分は決して遙は触らない。

だから遙の言う事に、雅也は「真実」を感じる。

「結論を言っとね、雅也これから大変なんだよ・・・」

「・・・もう大変な事になってるから。」

どのような話を聞こうと、これ以上の混乱はないだろう。

「明日か、明後日か・・・雅也死んじゃうんだ。」

「なるほど・・・」

「驚かないの？」

「十分に驚いている・・・」

実際、「近日中に貴方は死にます」という予告状をもらって、本当に死んでしまう人など皆無であろう。

しかし、ことごとくの千里眼を目の当たりにしたのでは、まったく信じないわけにはいかなかった。

「俺にそんな話をしたって事は、それを・・・つまり、死んでしまう事を回避できるから教えてくれた訳だ。」

「当たり前じゃない、本当に死んじゃうんだったら、教えないほうが幸せだわ。」

遙には血だらけとなり横たわる雅也のイメージが受信されている。

最初は横たわるだけのイメージだったが、集中するにつれ、

何故そのような事になったのかが理解できた。

「いい事と、悪い事を話さなきゃならないけど・・・」

「ああ、悪い方からにしてくれ・・・」

雅也は、「死ぬ」と予告されているのだ。

いかなる悪い情報でも、それ以上の衝撃など無いだろう。  
嫌な事は早く済ましたい。

「これは、何日も前から感じていたことなんだけど・・・」

雅也の住むアパートの住人が、幽霊にとりつかれているのだと遙は説明する。

雅也のアパートを訪れるたびに、強烈な「思念」を残した「霊」であることがわかったが、

遙は頑<sup>かたく</sup>なに「拒絶」することで、電波の受信を拒んでいたのだという。

同時に、とりつかれた住人の「生」が弱まっていくな事も感じた。

「どこの誰かはわからないんだけど、自殺するんじゃないかって思うの。」

「つまり、死ぬのは俺じゃないのか？」

「でも・・・関係はあるみたいなの。」

遙の瞳の色は、彼女の不安を映し出す。

「それがどういうメッセージなのか分かんなくて悩んでたんだ・・・」

アイスコーヒーのグラスが乾いた音を立てる。

## 後編

「赤い服を着た女性・・・ってゆーか、女の子。心当たりある？」  
「・・・まったく無い」

それが、原因となっている幽霊の事であるのか。  
それとも、さきほど遙が言った「いい事」なのか・・・  
どちらにせよ雅也には心当たりなどあるはずが無かった。

「赤い服ってゆーのは、イメージなんだよ。  
そーだなあ。お祭り・・・縁日なんかで赤い洋服着て喜んでる子  
なんだけど」

「女の子って何歳くらいなんだ？俺の親戚中思い返しても、小さい  
子なんていないけどな」

「あつ、ごめん・・・うつかりしてた

その子はもう何十年も前に亡くなってるみたいなんだけど・・・」

雅也の両親は共に小学校の教員をしている。

祖父母も元教員であり、姉も昨年から中学校の教員となった。

永沢家はまさに「子供」との接点が多い家柄なのだ。

「女の子」の「幽霊」ならば、その関係であろうと考えた。

「お父さんの兄弟に小さいとき亡くなった女の子いると思うんだ」

「ああ、そういえば小学校に入る前、亡くなった姉がいたって聞いたことあるな・・・」

「その子が・・・さつきから必死なの。あなたに伝えたい事がある  
んだって・・・」

雅也にとって叔母にあたる人の死。

遙に言われるまで、もう何年も思い出したこともなかった。  
無論、会ったことなど無いのだから、無理もない。

「なんて伝えたいの？」

「りんご飴、大好きだって・・・」

「・・・（汗）」

「ごめん、小さい子の感情だから、いろいろな思いが頭の中に雪崩  
込んでくるの」

伝えたい真意は『逃げる』ということだった。

『近日のうちに雅也に対する「不幸」がやって来る』

その思いと同じくして、亡くなる前の『女の子』の思い出が、遙の  
心に溢れ出すのだ。

縁日が好き。

りんご飴が好き。

わた飴はもつと好き。

「きつと、赤い洋服が一番のお気に入りだったはず・・・」

遙の目には涙が溢れている。

女の子の思いがそうさせているのだろう。

幼くしてなくなっているのなら、無理の無い事なのだ。

『生きる』事が当たり前で、『幸せ』に慣れていると、

亡くなった人達への気遣いを疎かにしてしまふ。

自分が死んだ場合、なにが怖いのか。

雅也はこう思ふ。

「忘れられる事が一番怖い・・・」

人間誰しも『死』とは隣りあわせである。  
それは避けることが出来ない。

『生』がある限り『死』は存在する。

例えば、同級生の中で一番長生き出来たとしても、  
裏を返せば、同級生のすべての死を確認した後、自分が旅立つのだ。  
誰一人見送る友がない中での『死』。

その事は、幸せであるのか否かは分からない。

圧倒的多数の人間は、  
平凡な家庭に生まれ、  
平凡な人生を送る。

歴史や表舞台に名を残さなくても、  
堅実で安定した人生を歩み、惜しまれつつ人生の幕を引く事が、  
圧倒的多数の人々が感じる幸せである。  
雅也はそう考えていた。

だから、自分が生を受ける前とは言え、  
近親である叔母の存在を、忘れていた事実にはひどく衝撃を感じた。

「・・・叔母は何の不幸か分からないけど、それから回避するよう  
教えてくれたんだ」

「回避だけじゃなくて、守ってもくれてるの」

「俺の『守護霊』は叔母だってこと？」

「守ってくれている人達の一人だと思うわ・・・  
女の子と、手をつないで隣に一緒にいる人達もいるもの」

遙から聞いた『守ってくれる人達』とは、  
雅也が思いつく『守護霊』という概念とは少し違っていた。  
生きている人には、多数の霊が集団でチームを組んでいるのだと遙

は説明する。

「スポーツのチームなんかとは全く違う感じだからね・・・」

その中でも一際存在感を発揮する、特別な存在。  
遙はそれを『指導霊』と呼んでいる。

「・・・なんかのテレビでそう呼んでたんだけど、便宜上そう呼ぶね」

そして雅也にも指導霊は存在し、それが叔母の手を繋いでいるらしい。

「その指導霊がね、ちょっと不思議なの。初めてかなあ、こんなのは・・・」

「・・・すごい悪霊だったら教えないでくれ」

「ははっ、それじゃ私が先に逃げちゃうよ。怖いんだよ、私も。」

時折不安気な表情を浮かべる遙。

それが雅也には、この話が作り話ではないって事を証明させられる様だった。

「その指導霊つて・・・雅也みたいなの・・・」

「・・・俺はまだ生きているぞ」

「そうなんだけど・・・」

「そうなんだけど？」

「うーん・・・私の能力じゃこころへんまでが限界なの」

二人はここまでの話を整理してみる。

まず、「悪霊」と「守護霊」からの二つのメッセージがあるらしい

事。

「悪霊」は直接的には雅也にとりついているわけではないが、なんらかの影響は及ぼすらしい事。

「守護霊」はそれから逃れるように忠告している事。

そして「守護霊」の一人は叔母であり、雅也自身でもある事。

「雅也は輪廻転生つてあると思う?」

「生まれ変わりか・・・」

前世・今生・来世・・・

魂の連鎖があるのならば、かつての前世に存在した『自分自身』が、守護霊の中にいたとしても不思議な事ではない。

小さな女の子である叔母の手を繋いでいる雅也の霊は、間違いなく叔母よりも年長だと考えられる。

「確証はなくても、今は信じたい気分かな・・・」

「ありがとう・・・」

「礼を言うのは俺のほうだろ?」

今日一番の笑顔で遙がこたえる。

「うつん、ありがとう。私、本当に嬉しいの・・・」

突然はじまった「幽霊」の話。

雅也が信じるか否かは、遙にとっても予想できない事だった。

「幽霊」を感じ取ることでできる能力<sup>ちから</sup>。

普通ではない世界を他人に話す事が、自分に対してリスクがある事は、

遙は嫌と言うほど経験してきた事だろう。

だから、恋人である雅也にも話せなかった世界。

でも、話す事になってしまった不安。

「で、どうすれば『不幸』を回避できるんだ？」  
「・・・とりあえず、何日間かはアパート帰らない方がいいと思う  
の。」

もう荷物もとりに行かないほうがいいと思うわ」

こうして二人は、午後からの講義も休んで遙のアパートで、  
間もなく来るであろう「不幸」をやり過ごす事になった。

そして2日後の夜、「不幸」はテレビの二ス速報で知る事になる。

ビビッ。ビビッ。

### 二ス速報

今日午後10時20分頃、 区坂下町のアパートで爆発による火  
災発生。

現在消火活動中・・・

「・・・・・・・・想像以上だったな」  
「・・・・・・・・想像以上だったわ」

雅也の一階下の住人が、ガスによる自殺を図り、  
そのガスがなんらかの原因で爆発したというのが、「不幸」の正体  
だった。

アパートの半分が吹き飛んだこの事件は、付近の住人が偶然撮って  
いた

ビデオカメラによって、全国二スに繰り返し登場する事になっ  
た。

幸いにも怪我人が数人出たものの、自殺した住人以外命を落とすも  
のはいなかった。

一瞬で吹き飛んだ雅也の部屋。  
そこに居たのならば絶命は免れなかっただろう。

その後が起こった火災のため、全ての家財は失ったが、「命」という最大の財産は残す事が出来た。

「・・・遙、今週末なんか予定ある？」

「とくには無いけど、どうしたの」

「叔母に会いに行こうかと思ってさ・・・りんご飴もって」

「あら、俄か供養じゃダメなのよ」

悪戯に微笑む遙を見ながら、

叔母だけではなく、自分自身に会いに行くような感覚を雅也は感じていた。

墓参りを決めたときから、遙をただの恋人とは思えなくなっているのだ。

なにか愛情の他に、深い繋がりを確信するのだ。

「前世でも私たちは恋人同士だったみたい・・・」

遙はそんな疑問のヒントをくれた。

「叔母はもしかして・・・」

「すごい、雅也もなにか分かったの？」

「いや、なんとなくだけど・・・」

空を見ながら遙は答えもくれた。

「そう、前世叔母さんは私たちの子供だったんじゃないかなあ・・・」

「そうだ。」

これが答えか。

理屈ではない。

魂の繋がりは、魂で感じるものなのだ。

二人がそう感じるならば、それが二人の答えなのだ。

幽霊は見えない。

でも、幽霊は存在すると遙と雅也は知っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5189c/>

---

幽霊って見たことある？

2010年12月10日15時13分発行